

2010年の初めに

10.01.04 守山裕次郎

戦後、半世紀余り続いた自民党主体の政権が、昨年夏の総選挙で一挙に崩壊した。敗戦の廃墟の中から国民一丸となって経済復興を目指し、世界でも稀に見る高度成長を遂げ、最後は究極まで膨らんだバブルが一挙にはじけてすでに20年、虚構に酔いしれた「宴の後」の後遺症は余りにも大きく、日本人としてのメンタリティーも含め、様々な分野で難題が山積しているのが今日の実態である。

官僚主導の政権運営にうんざりした国民が、小泉改革に期待を寄せて5年前、衆議院選で自民党に圧倒的勝利を与えたものの、長年にわたる政・官・財の癒着による様々な歪みを解消するには程遠く、その後の「年替わり総理」の資質のなさとも相まって、国民のストレスが一挙に爆発した結果が、昨年の政権交代劇だったのであろう。

ところが政権与党となった民主党も、その予算編成作業は全く思惑通りにはいかず、マニフェストに掲げた子供手当等バラマキ的政策実現のため、過去最大の借金積み増し予算となってしまったことは、皮肉としか言いようがない。昨年末にようやく閣議決定された「新成長戦略」の中身を見ても、それほどインパクトを感じる項目もなく、どこかのテレビ討論番組で出席者から、40年前に掲げた戦略とほとんど変わらず、何より工程表がないのと、目先のデフレ克服策さえ提示していないとの厳しい指摘がなされていた。

ただし民主党政権から出された今回の「新成長戦略」（基本方針）には、かつての官僚主導政治では書けなかったであろう「基本認識」が示されており、それを以下に紹介したい。

- 1) 私たちは今、長い衰退のトンネルの中にいる。経済は閉塞感に見舞われ、国民はかつての自信を失い、将来への漠たる不安に萎縮している。国全体が輝きを失いつつある。
- 2) 戦後、日本は奇跡の経済成長を遂げた。その背景には、経済大国アメリカという目標があった。国民も企業も、そして政治家、官僚も経済大国を目指すという共通目標に向かって、総力を挙げた。その結果が、世界第二位の経済大国の出現だった。ところが「坂の上の雲」を夢見て山を登り、その頂に立った途端、この国は目標を見失った。
- 3) 今、私たちの目前には大きな課題が迫っている。「リーマンショック」は、わが国の産業界、そして一人一人の生活に大きな傷跡を残した。税収が国債発行額を下回り、財政上は65年前の終戦当時の状況にまで悪化している。そして、急激な速度で少子高齢化社会に突入している。この失敗の原因は何か。それは政治のリーダーシップ、実行力の欠如だ。過去10年間だけでも、旧政権において10本を優に越える「戦略」が世に送り出され、実行されないまま葬り去られてきた。その一方で、政官業の癒着構造の中で、対症療法的な対策が続いてきた。

：以上は「新成長戦略」（基本方針）における「基本認識」の一部分の抜粋である。

まさにこの指摘の通りであろう。かつてのように、米国を手本にしていればよかった時代には、受験秀才の官僚が大いに力を発揮した。すなわち「規格大量生産」が盛りの

頃には、協調性と共通知識があり、個性と独創性のない人が強く求められた訳である。ところが目標を見失った瞬間に、彼らはどうして良いか判らなくなってしまった。今では「省益のみを追求する集団」と化してしまった官僚組織による支配体制の行き詰まりと、必要なはずのその変革に手をつけられなかった自民党政権。時代は移り変わり、過去の成功法則が通用しなくなっても、延々と同じ事を繰り返す愚、そしてそれを許した有権者。これらが事態を一層深刻にして今日に至ったことは間違いない。

ところで、昨年新たに発足した「若葉マーク政権」の政策の中で、唯一多くの国民から支持されたのが、例の「事業仕分け」の手法である。勿論、たかだか1時間位の議論でここまで理解できるのか、予算削減だけを目指す財務省の主導ではないかとの見方もあるが、従来のように、官僚同士のさじ加減だけで、しかもその間には「族議員」が絡んだ無理押しも入って決定されていた予算編成に比べれば、格段の進歩であろう。なお、科学技術や外交、防衛等の予算に関しては、それこそ国家戦略を明確にすることとの関連で議論すべきだが、それにしても民間に比べ、官僚の世界のコスト意識の低さには改めて驚かされる。

懲りない自民党に対する国民からの「大渴」によって政権交代はさせたものの、前途は極めて多難である。特に首相と幹事長のトップ二人の、金にまつわる問題は深刻である。片や、毎月1,500万円（日当50万円）の「子供手当」をママから貰っていても、全く知らなかったそうであり、片や、秘書が逮捕され、元秘書の国会議員が事情聴取をされても、本人はまるで他人事のようにどこ吹く風、「数は力」とばかりに、多くの議員を従えての中国詣でや、恩師・田中角栄を見習ったように、元日には150名を越える民主党議員を自宅に集めての新年会を開いたそうである。実質の独裁者との自負からかどうかわからないが、先般の宮内庁長官への罵詈雑言は見苦しい限りであり、品格のかけらも見うけられない。

先に述べた「新成長戦略」の「基本認識」で、過去の失敗の原因は「政治のリーダーシップ、実行力の欠如だ」と言っておきながら、自分たちが選んだ総理が金銭感覚もなく、決断力もないというのでは、まるで大矛盾である。諸外国から見て日本という国は、資質に乏しい「年替わり総理」を、性懲りもなく選んでいるものだと嘲笑されていると思うが、この国難の時期にあたり、恥を忍んで半年足らずではあるが「マッチベターな人物」への再交代しかないと思われるところに、この国の最大の悲劇がある。

閑話休題。

ヤンキースの松井選手がエンゼルスへ移籍することになった。思い返せば2003年、地元ヤンキーススタジアムで満塁で迎えた初打席、満員の観衆の大きな期待の中、プレッシャーの中で見事に本塁打を放つという衝撃的なデビューを遂げ、その後左手首の骨折や両膝の故障にもめげず、「フォア・ザ・チーム」の精神と、勝負強いバッティングで監督や同僚らからの信頼を得、昨年のワールドシリーズ最終戦では2本塁打、6打点という大活躍で念願の優勝を遂げ、見事MVPを獲得したのは周知の通りである。

それにしても松井選手という人物は「強運の持ち主」である。彼の米国での野球生活を振り返ると、まるで作られたドラマを見るかのようである。「人生山あれば谷あり」を地で

行くようなもので、苦節7年目にしてようやくワールドシリーズで優勝し、MVPまで獲得しながら、その最愛の球団を去らねばならない彼の心中は、いかばかりかとも思う。

勝負の世界は余りにも厳しい。常勝を余儀なくされている球団事情は判るにしても、ヤンキースのキャッシュマンGMは、今後多くの日本人から嫌われるであろう。少なくとも私は今年から、「くたばれヤンキース」をモットーにMLBを観戦したい。

そして松井選手には、温暖なカリフォルニアで両膝の回復に努めながら心機一転、新球団での一層の活躍を大いに期待したい。同じ西地区にあるマリナーズ、イチローとの勝負の機会が大幅に増えるのが日本人ファンとしては嬉しい限りで、シアトルに替わってアナハイムを訪れ、彼らの直接対決をこの目で見るのが「今年の夢」の一つでもある。

以上